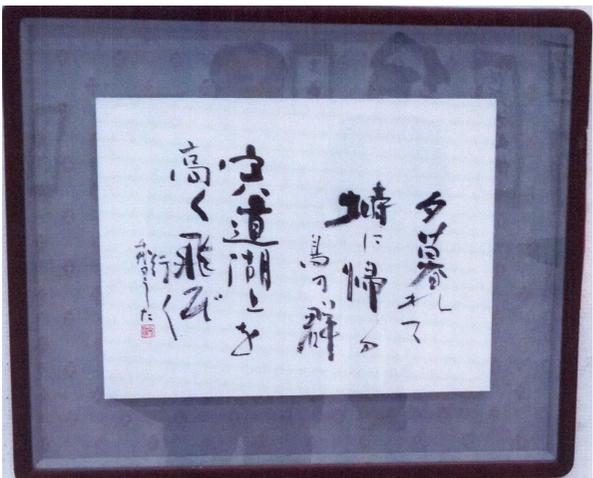


## 第三十六回島根書道協会展を観る

酒井 董美<sup>ただよみ</sup>

横川長流さん揮毫の母の短歌（筆者撮影）



ゴールデンウイークに入った五月二日、島根県立美術館ギャラリーで行われている標記の会に出かけてきた。会員で畏友の横川長流さん（選考委員）と真辺明静さん（審査員）のお二人より事前にいただいていた案内状で、開催を知っていたからである。その上、横川さんからは「今年も貴方の母上の短歌を現代短歌の素材として使います」とうかがっていたから、これで行かなかつたら天国の母に顔向けできないというのも大きな理由であった。会場では真辺明静さんと横川さんの夫人・静江さんと一緒に回り、横川さんから適宜解説を受けながら鑑賞することができた。

母の短歌は、上の写真の通り、

夕暮れの時に帰る鳥の群れ

穴道湖上を高く群れ飛ぶ である。母の喜ぶ顔が目に浮かぶようだ。

実は三回連続して母の短歌は、横川さんの出品素材として採用される栄を得ている。せつかくなので前の二回分を次に挙げておく。

前回・令和元年六月の同展の作品

紺碧の空を写して 穴道湖の蜷獲る舟 浪にたゆとう

前々回・平成三十年六月の同展の作品

落日は穴道湖上を彩りて 奇しき思いに吾を誘う

これらは平成十五年上梓した母の短歌集『穴道湖』―短歌・俳句・随想―に残されている。母は平成二十三年十二月二十八日に百歳を目前にして満九十九歳で物故したが、作品はいずれも穴道湖を詠っている。横川さんは「現代短歌などの揮毫は、やはり郷土を描いた作品を素材とすべきと考えています」と所信を語っておられる。たまたま母の作品が横川さんの眼鏡にかなったのだらうが、筆者は書家に限らず地方在住の作家は郷土からの視点を持つべきだと考えている。筆者が山陰両県の民話やわらべ歌を中心として研究するのも同様であり、半世紀以上前からそれを貫いているのである。

それはともかく、今回の書道展も出品者一人一人の個性が豊かであり、眺めているだけでエネルギーが鑑賞者にもお裾分けされるようだった。お互い実に愉快で充実した気分をしっかりと味わえたのであった。（元島根大学法文学部教授）